

トランスジェンダー をいきる (7)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生(4)男性性崩壊の危機——「男らしく耐える」という課題

1 始めに

ちょうど、「9、10歳の壁」と言われる小学校4年生から5年生にかけて、立て続けに2つの出来事が起こった。この2つの出来事は、両者とも私を「男性性崩壊の危機」へと直面させた。まず、2つのエピソードを記述した上で、その体験が現在、どのように現れているかを分析する。

2 Aとの突然の別れ

①「俺を男にしてくれる女っぽい男の子はもういない」

小学校4年生の2学期後半辺りから、Aが学校に来なくなった。前述したように、高い女性性を利用した彼の行動様式によって、男性性を強化してきた私にとって、この出来事はショックであった。では、なぜそれほどまでに「ショック」だったのだろうか。

私にとってAは、「自分を『男』にしてくれる、女っぽい男の子」であった。彼が私を「男」にしてくれたときというのは、寡黙ながらも冗談を言って彼を笑わせたことや、彼の苦手の算数や点字を教えたことである。この「教える」という行為に至っては、自己の男性性をフルに発揮することができたので、当に「天にも昇りたいような心境」であった。そのような彼の前では安心して「男の子」になることが許されたし、また彼の高い女性性が私をよりいっそう「男」へと駆り立てた。しかし、彼が学校に来なくなったことで、私を男へと駆り立てる女性性の高い人物がいなくなったことがショックとして立ち表れ、自己の

男性性崩壊の危機を迎えることになった。

では、彼以外に女性性の高い男の子はいなかったのだろうか。ここで、当時の盲学校の男子児童の大まかなジェンダー傾向について説明する。

私が通っていた当時の盲学校には、比較的女性性の高い男児が多かった。「視覚障碍のある人たちは無性である」とか、「性別を感じさせない視覚障碍のある人たち」などと表象されることが多いが、実際の盲学校の教育現場や私生活では、障碍のない児童よりジェンダー化された要求や扱いによって、自らの感情を抑圧したり、行動や思考を規定させられていた。「男の子だったら、、、」、「女の子だったら、、、」と、わざわざジェンダーを利用して、個々人の行動や思考性を規制したり規定したりする背景には、「この子達は視覚に障碍はあっても、将来、社会に出しても恥ずかしくない大人にしなければならない」という、盲学校教師や保護者たちの視覚障碍のある児童たちへの強迫的な関わりを垣間見ることができる。つまり、盲学校の教育現場でも私生活においても、個々人が社会の中で生きていく権利保障のための「権利としての社会化」ではなく、視覚中心の「社会適応のための社会化」を個々人に意識化させるためにジェンダーを利用して「一人前の社会人」を生産するための戦略的方法が取られた。

だから、盲学校の教師や保護者から女性性の高い男児たちに対して、「男の子らしくしなさい」と注意されているところを目撃した。しかし、当時の私は、そのような彼等に対して、自己の男性性を強化していったかといえそうではなかった。このときすでに A に初恋していたので、彼が特別女性性の高い男の子であったというよりは、そのような彼への恋愛感情によって、男性性が鼓舞され、強化されていった結果であろう。

②「男らしく耐えること」による感情の封印

小学校 5 年生になって、担任が再び年配の女性教師になっても、A は学校に来なかった。そこで私はある決心をすることになる。それは、この局面を「男らしく耐えること」、つまり、A がなぜ突然学校に来なくなったのかを、当時の担任の女性教師に聞かない、たとえふとしたことで A の話が話題になったとしても、自分からは絶対にしないし、聞いても聞かなかったことにする、ということであった。それでこそ、男の忍耐、すなわち、男は本当につらいことがあったとき、口数が少なくなる、ということ自身に言い聞かせた上で、A の話それ自体をタブー視していた。そのような感情封印を繰り返した体験の結果、現在でも、自己にとって本当に大事な人であればあるほど、例えば病気の容態や災害時での安否を気遣うことを「男らしくない」とタブー視して感情を封印し、その話題からの逃走を図っているのである。

3 気まぐれな祖母の言動

A が学校に来なくなったことと軌を一にして、「男性性崩壊の危機」に関わったもう 1 つ

の出来事が、「気まぐれな祖母の言動」であった。

①男の子にしてくれた気まぐれな祖母

祖母は、その日の気分や状況で態度をころころと変える人であった。よく言えば気前はよいが、悪く言えば一貫性がなく、思い込みの激しい部分もあった。

当時、私の家では、祖母が最年長であった。「年長者を大事にする」という家訓に従い、祖母のどんな無理難題にも、家族総出で従わなければならなかった。にも関わらず、実際には祖母と両親との間のいざごさは絶えなかった。そのようなとき、祖母はいつでも「最年長者」を楯に、その気まぐれさをいっそう発揮させ、家族の中を混乱させては、しばらくの間家出をすることを繰り返していた。その家出の際、時々私がターゲットとして付き合わされ、しばしば両親と2歳年上の兄と離れなければならなかった。

小学校1年生から3年生の途中まで、実家から盲学校までの道のりが遠いことを理由に、祖母と2人で盲学校の近くにアパートを借りて通学していた。祖母との生活の中では、事あるごとに「女の子としての要求」はされていたものの、そのつど「男の子としての要求」へと代入したことによって、ますます男性性を強化していった。だから、そのような祖母に対しては、何のためらいもなく「男の子」になれたのである。

また、家訓に従い、祖母のいうことは何でも素直に聞いていたので、祖母にとっては「自慢の子」として人前で誉めそやされる存在になり、同時にそのことは、子どもであることを理由とした無理難題や弱音を吐くことを許されなかった。そのような厳格さを背景に、自らも祖母に対して、子どもであることを理由とした無理難題や弱音を吐くこと＝「男の子」から「女の子」へと転落する恐れを感じ取っていた。

要するに、私の男性性は、身体が女の子であっても、人前に出たときだけ「自慢の孝行息子」として、祖母からうまく利用された。そのことを「男の子としての喜び」として存分に味わいたかったので、そのような祖母からの戦略的な利用のされ方とは無関係に、とにかく「男の子にしてくれる」というメリットによって、その無理難題をどこまでも引き受けたというのが、当時の私の心境であった。

②短期間の祖母の家出

小学校5年生のことである。当時、盲学校の寄宿舎に入舎していたので、週末になると実家に帰省していた。その帰省していた土曜日の夜、例によって、両親と祖母の間で言い争いになった。その原因はどうやら私のことのようにあったが、言い争いの詳細についてはなにも聞かされていなかった。

翌日の日曜日の朝、朝食を取っている私を前に、祖母が家出をすと言い出した。祖母は、いったん言い出すと利く耳を持たない人であったことは子供心に知っていたので、そのまま聞いているしかなかった。

これは、後年亡くなった母から聞いた話であるが、祖母が家出をする際、私に「言ってはならないことを言った」と言う。私が記憶していたのは、祖母が泣きながら何かを言っていたのだが、その「何か」を記憶していない。その記憶していない「何か」は、生前母が言っていた「言ってはならないこと」に繋がるのかもしれない。しかし、母はその「言ってはならないこと」について口にしなかった。ということは、どのようなことが考えられるだろう。前項で述べたように、Aが突然学校に来なくなったことのショックやつらいことなどを、両親や友達や担任の年配の女性教師に吐露することなく、男らしく感情封印してきた。しかも、その感情封印は、Aの件だけではなく、他に自己にとってつらいことや悲しいことにも適用された可能性が高く、その「言ってはならないこと」も、自己の記憶から抹殺しなければならなかったほど、残酷な言葉であったことが考えられる。

③再び「男らしく覚悟する」が

しかし、祖母の涙ながらの次のフレーズだけは、今でも記憶に新しい。それは、「たとえば家族や学校の教師や友達がいたとしても、あんたは独立独歩で生きていく覚悟をしなあかん」であった。そこで私の決心は、石のように固まった。すなわち、どうせAもいなくなったし、これからはどんなにつらいことがあっても、「男らしく覚悟して」生きていく」という自身への宣言であった。

しかし、今から考えると、祖母のフレーズは、幼いころから聞かされていたこととはいえ、この日の私にとっては当に「男らしく覚悟する」という意味で、苦言を呈する内容であった。すでにAがいなくなったこともあって、その覚悟の仕方に中途半端は許されないという厳格さをも伴っていた。

自己を「男にしてくれる人物」が、一気に2人もいなくなったことによって、これからの男性性の維持・構築をどのようにしていくか。私は事故を鼓舞するように、小学校5年生の自己の心身に重い課題を突きつけた。だが、思ったより、この課題は重すぎて、ほとんどこなすことはできなかった。たとえば、音楽の時間に歌いながらふっと泣き出しそうになったり、座学では教科書を忘れ、授業も上の空だったので、担任の女性教師から叱られ、成績も低空飛行だった。そのような中でも、つらいことを誰にも吐露しなかったことだけが、唯一男性性を堅持していた側面であった。

④「裏切られた決心」は感情の封印へ

しかし、「男らしく覚悟する」決心は、ものの見事に裏切られた。

家出から約2週間後、突然祖母が戻ってきた。土曜日、盲学校の寄宿舎に平然とした面持ちで迎えに来た祖母に対し、びっくりしたのと同時に、「なんで今頃俺の前に来やがった」という怒りの感情が沸き上がってきた。では、戻ってきた祖母への「怒り」とはいったいどのようなものであったのか。前述したように、家出する際、涙ながらに私との決別の言葉を発したり、どんなことがあっても誰にも頼らずに独立して生きていくようにと苦言を

呈した上で、不十分ではあったものの「男らしく覚悟すること」を決心させられた。にも関わらず、その決心がたった 2 週間でもの見事に裏切られたことへの怒りであった。しかし、その怒りを決して言葉にすることはなかった。そのときに唯一許されたのは、自己の感情を凍りつかせること、つまり、怒りの感情を感じなくさせることだけであった。また、怒りの感情を言語化するすべを見出せなかったこともあるが、その怒りの感情を言語化することは、即座に女の子へと転落してしまう危険性を意味した。したがって、この場合でも、戻ってきた祖母を黙って受け入れることで、感情を封印した。くしくもこの体験が、「女性の口は、むやみに人の同情を買おうとする道具、女性の決心は決心ではなくてただの気まぐれ」というように、祖母を代表して、自己の女性イメージをいっそう悪いものにしていったのである。

4 感情の封印は、そのまま外傷体験に

上記 2 つのエピソードを通じて考えなくてはならないことは、感情を封印した体験が、そのまま外傷体験として残存し、ことあるごとに出現していることである。なぜ、上記 2 つのエピソードが、未だに外傷体験として残存しているのか。

前者のケースでは、社会人になって A と再会した。そのとき、彼が突然学校に来なくなったことへのショックに対する自己の心理状態や行動様式に関する話をした。彼に対するこのような話は、彼との間での「過去の清算」はなされたものの、この体験がもたらしたもう 1 つの「過去の清算」、すなわち、彼が学校に来なくなったことによるショックやつらいことを誰にも吐露することなく、「忍耐を持って男らしく耐えた」という体験がもたらした「内面の過去の清算」がまったくなされていなかったことに気づかされた。この体験が、そのまま現在にまで持ち込まれた結果、本当に大事な人であればあるほど、その人の消息を確かめようとしな。そればかりか、消息を確かめること＝男らしくないという図式を内面化していることである。

後者のケースでは、しばしば両親との間でいざこざを起こしていた祖母の家出によって引き起こされたつらい体験を誰にも吐露しなかった部分、つまり、「内面の過去の清算」がなされていなかったところは前者と共通しているが、その気まぐれな祖母との「過去の清算」もなされなかったところが、前者との大きな相違点である。しかも、後者のケースでは、家出をする際の不必要な「決心を促す言葉」に対する謝罪の言葉がなかったことが、外傷体験の重度化を引き起こし、いっそう女性イメージを悪くしていった。

したがって、A との「過去の清算」がなされたのは、ジェンダーレベルでの男性同士のホモソーシャルな関係性の下で行われた相互行為であったから、「内面の過去の清算」がなされていなくても、外傷体験の重度化は最小限に留まっている。しかし、祖母との「過去の清算」がなされなかったのは、気まぐれな祖母を代表していっそう悪くなった自己の女性イメージによって、祖母に対してもそれ以上の「過去の清算」を望まなかった。その代わ

りに、外傷体験の重度化を自己の中に「男らしく」引き受けた結果、現在にまで至っている。

5 終わりに

「たかが小学生時代に貸した課題」、「されど小学生時代に貸した課題」。外傷体験は残っているものの、私はそのような自己に拍手と栄誉賞を送りたい。実現不可能な重い課題ではあったが、苦しかった中にも、自らサバイブしようとしていたからである。この時期に流行した歌やテレビ番組など、今ではいとしい思い出として残っている。

うしわか こうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）